

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Some features of the Japanese transliteration of Russian words and phrases in the documents based on the interviews with the crew of Shinsho Maru (1)

|       |                                                                                                                    |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2006-06-01<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/626">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/626</a>            |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 神昌丸漂流民聞き取り資料における ロシア語の仮名表記について(1)

岡 本 崇 男

## 1 漂流民言語資料の意義と利用方法

「初めてロシア語を学んだ日本人は誰なのか」という質問に正確な答を出すことはできないのだが、少なくとも17世紀末に極東の地カムチャトカを征服するためにこの地を訪れたロシアのコサックが伝兵衛という大阪出身の漂流民を発見し、ロシアに連れ帰ったという記録が残っている。<sup>1</sup>カムチャトカがロシアの支配下に入ったのがちょうどこの時期（1697年ごろ）であり、これ以降、ロシア極東沿岸および島嶼部に漂着した日本人の記録が残るようになった。<sup>2</sup>ただし、伝兵衛は帰国を許されず、ロシアに骨を埋めたとし、その後ロシアに保護された何人かの日本人も誰一人帰還を果たせずにはいた。結局、日本の地を踏んだのは、1792年（寛政4年）にロシアの遣日使節に送り届けられた伊勢出身の三人の神昌丸漂流民のうち、江戸まで辿り着いた大黒屋光太夫と磯吉が初めてであるので、彼ら二人が日本にロシア語を「正式に」伝えた最初の人物だということになる。当時の日本は鎖国の体制を取っていたため、外国に十年以上滞在した二人の漂流民はロシアでの行動、ロシアの事

1 伝兵衛をロシアへ連れ帰ったコサックのアトラースフの報告、および伝兵衛自身が行った報告については〔村山1965a, 1-17〕に詳しく書かれている。本論文でもこれを参考にした。

2 アリューシャン列島がベーリングによって征服され、ロシアの版図に組み入れられるのは、カムチャツカ征服よりもさらに半世紀後の1741年のことである。

情などについて幕府や諸藩の官吏から度々調書を取られている。それらのうち、主に仮名によって音転写されたロシア語の単語や表現を収めた文書記録のことを本論文では「神昌丸漂流民の言語資料」と呼ぶことにする。

言語資料に収録されているロシア語の語句の数と種類は個々の文献によって異っているが、なかでも『北槎聞略』、『魯西亞辨語』、『魯西亞語類』からは相当な量の情報を得ることができる。これらの文献は漂流民達がロシア滞在中に聞き覚え、実践的に使用していた言語形式を聴取者が記録・整理し、書物の形で編纂したものである。

従って、漂流民がもたらした言語資料を分析すれば、母語の音韻の区別しか知らなかった日本人の耳にロシア語の音韻がどのように捉えられていたのかを探ることができるかもしれない。あるいは、ヨーロッパ語にかんする予備知識を全く持っていなかった人々がロシア語の形態システムや統語法をどの程度理解していたのかを知る手がかりを得ることも期待できる。更に、分析作業の過程で、漂流民達が直に触れていた18世紀末の生きたロシア語や当時のロシアの言語状況を垣間見ることも可能であろう。

帰還漂流民がもたらした数々のロシア語資料を分析した村山七郎は、「大黒屋光太夫の言語学上の資料」と題する論文の中で、『北槎聞略』（特に卷之十一）について以下のように述べている。

…聞略のロシア語資料は、ロシアにおけるロシア語の実際の発音状態を反映しているのであって、実に貴重と言わなければならない。日葡辞書が室町時代の日本語の研究に対してもつ意味に匹敵するほどの意味を聞略のロシア語資料が18世紀後半のロシア語の研究に対して持つとは言えないにしても、ソ連のロシア語史的方言学者が聞略や環海異聞のロシア語資料に注意を向けてくるのは今や時の問題である。

[村山 1965b, 3-4]

ところが、ソ連で『聞略』のロシア語訳と注釈を収めた研究書

[Konstantinov (1978)] が出版されるのは上記の村山論文から13年後のことであり、ソ連およびロシア語のロシア語史研究者が『聞略』を始めとする日本人帰還漂流民のロシア語資料に注目した形跡はない。ロシアにおいてこれらの資料が意味を持つのは日露交流史研究や言語接触などの分野に限られている(例えば、[Bondarenko (2000)])。

おそらく一般に、ある言語にとって、その言語を母語としない外国人が記録・編纂した資料が意義を持つためには、その言語の運用の実態がまだ十分に記述されていないことが条件となる。例えば、16世紀末のモスクワ大公国のロシア語を記録したイギリス人 Mark Ridley の辞書と小文法、17世紀初頭のロシア語を記録したイギリス人 Richard James の辞書、そして17世紀末のロシアの言語状況を的確に伝えるドイツ人 Heinrich Ludolf の文法書などは、この種のものが同時代のロシア人によってまだ著されていなかったため、ロシア語の歴史を研究する上で極めて重要な資料となった。

これらの外国人観察者に共通しているのは、彼らが自分たちにとって外国語であるロシア語の語彙や文法を記述する方法を知っていたということである。それは彼らが古典語、すなわち自分たちの母語とは時間的にも空間的にも大きな隔たりを持っているラテン語(場合によってはさらにギリシャ語)を幼い頃から学習した経験を持っていたことと関係がある。古典語は母語からの類推で理解できないため、学校であれ、家庭で個人教授を受ける場合であれ、なんらかの教科書を通じて言語規範を学習しなければならない。特に、ラテン語は古典語であるだけでなく、ヨーロッパのかなりの部分においては司法・行政・学芸および教会の書記言語として近代に至るまで使用されていた「生きた」言語なのであった。文法記述も、ラテン語で行われるのが伝統的であり、文法の諸概念や用語法もラテン語の土壌で培われてきた。このため、対象言語が何であれ、その文法を記述したり、語彙項目の一覧を作成しようとするとき、ラテン語の経験に頼るのが自然なことであった。

ロシアにおいても正教会の聖典言語である教会スラヴ語の文法書が17世紀

になって導入される。これは司法や学術の分野でラテン語を使用するポーランド・リトアニア連合王国の版図に組み込まれていた南西ルーシ(ベラルーシおよびウクライナ)の教養人がラテン語の素養を生かして作り上げた規範書が元になっている。ただし、聖典言語だけでなく世俗の言語の規範記述も模索した南西ルーシと違い、ロシアでは文法記述の対象があくまでも教会スラヴ語に限られていた。ロシア人自らの手になる自らの言語の規範書が登場することになる18世紀以前のロシアには、ロシア語を独立した文法体系を持つ言語だとみなす土壌がまだ出来上がっていなかったのである。ところが、ロシアを訪れた西欧の教養人の中には、当地の神聖言語(=教会スラヴ語)と世俗言語(=ロシア語)とが適用領域の住分けを行っている状況を敏感に察知したり、綴と現実の発音との違い、語彙の文体的な違いなどを理解できた人が少なからずいた。したがって、この人達が残した観察記録は、その時代のロシアの言語状況を知り、ロシア語の使用状況を垣間見るために欠かすことのできない資料だということができる。だからこそ、B・A・ラーリンのような著名なロシア語史研究者もこうした資料に注目し詳細な研究を残している。<sup>3</sup>

一方、神昌丸漂流民がロシアに滞在した18世紀末期にはすでにロシア語が学校で教えられており、規範の拠り所として文法書や辞書も出版されている。しかし、当時の規範書には、新しい時代のロシア文章語を作り出すための言語プログラ的な性格が強く現れていることが多い。つまり、このような規範書を通じて知ることが出来るのは、これらを作成した人々の私的なロシア語像であって、実際の言語使用の概要ではない。そこで、外国人によるロシア語観察記録がこの時代においてもそれなりの価値を持つ。ロシア人よりも客観的な観察がなされている可能性があるからである。

こうした価値を持っているにもかかわらず、日本漂流民の言語資料がロシア語史研究者に注目されなかった第一の理由は、日本人の耳で聞き覚えた言

<sup>3</sup> [Larin (2002)] 参照。

葉が日本語の仮名で表記されているからだと思われる。事実、ヨーロッパ語の素養を全く持っていなかった漂流民はロシア語の音声について語る時に、日本語と同じように音節単位で把握する以外の方法を知らなかったようである。このことは『魯西亜噺本』の以下の記述から推測できる。

…ДО ドトと読む。ДЪ セにもあらず、タにもあらず、其セタの間なり。ДЪ チエにもあらず、ツにもあらず、チエツの間なり。ТЪ タにもあらはれども読声なき故、先タに近し。ТЪ チエにもあらざれども、よミ声なき故、先チエに近し。ПЪ 読声なき故、ヲに近し。ДЪ 読声なき故、リに近し。余ハおして知るべし。此ЪエルЪエリの二字よミ声なき字あるゆへに、ヲロシヤ詞甚聞取りがたし。余ハよミ声なき字ハ筆に及がたし…[噺本, 89]

つまり、証言者は母音をともなわない子音の聞き取りに苦勞した経験があり、ロシア語の音声を仮名で表記するのが困難であることを認めている。しかし、日本人に説明するためには仮名表記に頼る他に手段がないので、結局のところ近似的な表記をせざるを得なかった。

表記のための文字体系による制約はヨーロッパ人によるロシア語の記録と漂流民言語資料を比較すると明らかになる。表1はイギリス人 Richard James による語彙集と『北槎聞略』卷之十一のどちらにも含まれている単語を拾い上げて比較したものである。何らかのヨーロッパ語の基礎的な教育を受けた日本人にとっては、アルファベットと片仮名の表記の間にそれほど大きな違いが感じられないかもしれないが、それは外国語を仮名転写するときのおおよそのルールが理解されているからである。しかし、[Konstantinov (1978)] や [Bondarenko (2000)] で実践されているように、この仮名表記をアルファベットで表記してしまうと、印象はかなり違ったものとなる。すなわち、*ytka* と *y:nyka* (ロシア語 *ytka*), *bomaga* と

бумака (бумага), seostra と сэсутара (сестра), knaes と киниядзии (князь), geerna と дзирунои (жирно / жирный), zelliana と дэро́на / дэ́рэнои (зелено/зелёный) というふうに対置して見ると、二つの表記の間にはかなりの違いがあるという印象を受ける。まして日本語の知識を持たない人には、日本語の音体系と書記体系という二つのフィルターを通ったロシア語の語句が甚だしく変質してしまったように見えるかもしれない。おそらく、このような理由で日本漂流民の資料は、これらの研究および翻訳に携わったロシアの日本学者の努力にもかかわらず、ロシア語史研究者の関心を引かなかったのであろう。

表1：表記の違いの比較

| ロシア語              | R. James の語彙集     | 『北槎聞略』卷之十一           |
|-------------------|-------------------|----------------------|
| утка [utkə]       | ʏtka, a duc       | ウーツカ 水鳥              |
| бумага [bumagə]   | bomaga, paper     | ブマカ 紙                |
| сестра [s'ɪstra]  | seostra, a sister | セスタラ 姉               |
| князь [kn'asʲ]    | knaes, a duke     | ウェリコイキニヤヂイ 太子        |
| жирно [ʒirnə]     | geerna, fat       | ヂルノイ 肉, ジルノイ 肥(ふとる)  |
| зелено [z'el'ɪnə] | zelliana, greence | ゼロナ 青, Зелеノイ 緑(もえぎ) |

16-17世紀にロシアを訪れたヨーロッパ人が残したロシア語にかんする記録が日本人漂流者のそれよりも高く評価される理由は他にもある。すでに述べたように、これらのイギリス人やドイツ人にはラテン語の素養があることに象徴される高い教育を受けた知的エリートであり、古典語以外にも複数の外国語に通じている。このため、未知の外国語に接したときに、その言語をどう学習すべきかを知っており、記録に際してもいくつかの言語の文法を学んだ経験を生かして、そのロシア語を体系的に記述することができたのである。つまり、ロシア語はラテン語と同じタイプの屈折語であり、ラテン語と似た文法範疇を持った言語であることに何ら疑問を抱かずにロシア語の語彙や文法を記述した。実際のところ、その先入観と方法に大きな間違いはなく、なおかつ同時代のロシア人に彼らほどの学識と技量を備えた人物が現れなかつ

たので、結果的に西欧知識人の資料は信頼に値するものとなったのである。これに対して、日本の漂流民は、ヨーロッパ式の文法教育など受けていないので、「言語規範の体系」などという概念は持ち合わせていない。おそらく、膠着語と屈折語というような言語のタイプの違いもよくわからない。その上、前述のように彼らの証言にもとづく記録は表記上の問題が極めて大きい。このような事情であるので、ロシア語の体系を知るための資料としてはヨーロッパ人のものと比べて形式面での信頼性が低いことは認めざるを得ない。

ところで、日本の漂流民に言語の「体系」という先入観がないのだから、彼らの証言にもとづく記録には自分たちが聞き覚えたロシア語の語句がそのまま反映されていると考えるべきではない。資料には、18世紀末のロシアで実際に使用されていた社会的方言と地理的方言、俗語と標準語が収められていることが確実なのであるが、もし漂流民たちがロシア語の話し言葉と書き言葉の違い、話し相手の地位による言葉遣いの違い、地域による語彙や表現の違いなどに気付いていれば、それが記述に反映されているはずである。従って、これらの資料を扱う時には、先ず第一に、情報提供者にロシア語の規範や文体について何らかの意識があったかどうかを確認する必要がある。また、記録編纂者についても同様である。どちらかにこうした意識があれば、記録作業にそれなりの影響が及ぶと思われる。

漂流民が規範や文体の意識をもってロシア語を使用していたかどうかという視点は、村山七郎のように多くの漂流民資料の分析を行った実績のある研究者にも希薄であったようである。例えば、[村山 1965a] ではロシアに残った漂流民の記録に見られる彼らの方言（薩摩方言、三陸方言、津軽方言、伊勢方言、仙台方言など）が興味を中心となっており、[村山 1965b] では大黒屋光太夫がもたらした情報におけるロシアの方言特徴に関する記述が特に目立つ。その理由はおそらく、「ソ連のロシア語史的方言学者が聞略や環海異聞のロシア語資料に注意を向けてくるのは今や時の問題である」[村山 1965b, 4] と述べて、この資料が高い価値を持つことを強調した村山も、実



のところは漂流民のロシア語能力をあまり高く評価していなかったからなのかもしれない。例えば、「光太夫のロシア語の知識は、学校で正式に学んで得られたものでなく、耳から入ったものが根底となっており、ロシア字で書いたものもやや読みこなせた程度であると結論される」[村山1965, 18] というような、漂流民ロシア語資料の質的な限界を認めているとも取れる発言さえ見られる。

しかし、西欧知識人によるロシア語の記録では、言語情報の収集と整理そして分析が同一人物によって行われているのに対して、日本側の資料は情報の提供者とそれを聴取・整理・編集する人物が違っている。つまり、両者の共同作業の結果生み出されたものなのである。そして、この作業を進める過程で互いに欠けた知識を補い合った可能性も否定できない。特に、『北槎聞略』の編者である桂川甫周は、当時の日本においてかなりの学識を有する蘭方医であり、記録によればオランダ語の読み書きだけでなく、会話もできたようである[文字集, 81]。もちろん、文法の内容を持ち合わせており、品詞や形態範疇の何たるかも知らないはずはない。従って、神昌丸漂流民言語資料を18世紀末ロシア語の資料として利用するためには、先ず情報提供者のロシア語体系の理解度と編纂者の学識と技量も考慮に入れた上で、仮名表記とロシア語の音声との対応関係を明確にした後、元の形式をできるだけ正確に復元するという作業プロセスを経なければならない。

## 2 資料について

神昌丸漂流民が情報源となったロシア語資料のうち、言語に関する記述の豊富なものとしては、ロシア語の語彙集である『北槎聞略』(卷之十一)、『魯西亜辨語』、『魯西亜語類』がある(これ以降、それぞれの書名を『聞略』、『辨語』、『語類』と略記する)。これらは語彙の提示形式が違っているのだが、収録されている語句の多くは共通であるので同一の原資料を元に作成されたと考えられている[辨語, 18-19]。また『語類』には姉妹本が存在し[岩井

1976], さらにこれら二つの本の元となった文献があったことがわかっている [岩井 1992]。本論文においても主たる資料をこれら三つの文献とするが、これらに加えて『魯西亜噺本』も利用する。これはロシア語の収録語数こそ上記の3資料に及ばないが、ロシア語の仮名表記については時に『聞略』よりも正確であり、先に示したようにロシア文字の読み方にかんする記述が含まれている貴重な文献である。

### 3 復元のための予備作業

#### 3.1 これまでのロシア語復元作業の試み

ロシア語を仮名で表記するときどのような特徴、傾向あるいは法則性が見られるのかを検討するためには、仮名で綴られた語句が実際に対応しているロシア語の形式をできるだけ正確に復元しなければならない。

実は、仮名表記から元のロシア語を復元する作業はかなり以前から行われている。光太夫の言語資料(主として『北槎聞略』)の分析 [村山 1965b], 『魯西亜噺語』の翻刻 [噺語] などがその代表的な例である。また、V・M・コンスタンチーノフによる『北槎聞略』のロシア語訳および注釈 [Konstantinov (1978)] には神昌丸漂流民が記憶したロシア語の単語や表現のほとんどが推定されている。また、仙台石巻漂流民の聞き取り記録である『環海異聞』が提供するロシア語資料については、岩井憲幸が詳細な分析を行っている [岩井 1986]。

上記の復元作業のうちで最も信頼されているのは、V・M・コンスタンチーノフのものであるように思われる。なぜならば、1990年に出版された岩波文庫版『北槎聞略』は、本文を1937年(三秀社刊)および1965年(吉川公文館刊)のテキストにもとづきながら、先に述べたコンスタンチーノフの研究成果を「全面的に利用」している [聞略a,3 および 482]。確かに、標準ロシア語のみならず古語、俗語、方言のいずれについてもロシア人研究者の知識が勝っているのは言うまでもない。

しかし、収録語句の数で『北槎聞略』に匹敵する『辨語』の翻刻が公にされたのが、コンスタンチーノフのロシア語訳よりも6年早い1972年であったことを忘れてはならない。ただし、コンスタンチーノフは1967年に没しているので、『辨語』の翻刻を参考にはできなかった。したがって、二つの復元作業は互いの成果を参考にすることなく、独自に行われたということになる。そして、それぞれの作業方針には違いが認められる。

『辨語』で復元を担当した中村喜和は仮名表記から推定される形式に情報提供者の誤りがあると思われる場合でも、ありのままを再現することを恐れていない。例えば、「モイドチ 我娘 わがむすめ」に当てられたロシア語は“МОЙ дочь” [辨語, A94オ] (下線は中村による)である。正しい形式は“МОЯ дочь”なのだが、「モイドチ」という表記から元のロシア語を単純に復元すると、最初の単語は моя /moja/ ではなく мой /moj/ となってしまう。

一方、コンスタンチーノフの露訳『聞略』では、できるだけ音声的にも文法的にも正しい形式を当てる努力がなされている。例えば、「ボリショイセスタラ 姉」には“большая сестра”を当てる。おそらく、露訳『聞略』においては、ロシア語の音声と仮名表記との間の関係にあまり関心が向けられていなかったのであろう。その証拠に、「ギレメニ 火石(ひうちいし)」に対してコンスタンチーノフは ремень「革紐」を当てている。「火打石」と「革紐」では意味的繋がりを探るのが難しいのであるが、「レメニ」(рэмэни)と ремень は確かに音声的に近い関係にある。ところが、露訳の付録「本書に現れる日本語、中国語、アイヌ語の単語と表現」には“хиутииси 火[打]石 (собст. 燧石) кремь” [Konstantinov (1978), 447]と説明されている。

なぜ経験豊富な日本学者は「ギレメニ」を“кремь”と復元しなかったのだろうか。『聞略』巻之十一に収録された語句を一瞥すると、“книга”が「キニガ 書籍」，“октябрь”が「ヲキチャーブリ」，“грамота”が「ギラマト 書翰(しよかん)」，“глаза”が「ギラザ 眼」のように、ロシア語の kCV,

gCV という結合が、日本語では kiCV, giCV で再現される傾向があることがわかる(Cは任意の子音, Vは任意の母音)。従って, “кремень” が「キレメニ」になることは極めて自然なことである。そして筆写の過程で濁点が落されたり追加されたりすることは珍しくない<sup>4</sup>ので, やはり清書本の「ギレメニ」が“кремень”のことであると断言して差し支えない。それにも拘らず, この表記から“ремень”を復元したコンスタンチーノフはアクセント位置の定まっていない平坦な гирэмени という音連続をイメージしていたのだと思われる。もちろん, 語頭に子音が連続する場合に先頭子音が脱落するという現象も見受けられるのであるが, それはこの文献に限っていえば“BC(тp)…”のみである。もっとも, これによって露訳『聞略』のロシア語復元作業の価値が低下するわけではない。[聞略 a]が全面的な信頼を置いたことからわかるように, コンスタンチーノフが復元したロシア語の語句が, 参考に値すべきものであることに変わりはない。ただ, 表記とロシア語音声との対応関係の分析と確定を怠ってはならないのである。

### 3.2 復元の手順

『聞略』と『辨語』のロシア語復元作業の結果を見ると, かなりの数の語句は直感的にロシア語の形式と結び付けられ, 残りの多くの語句もすでに復元された形式からの類推によってロシア語の形式が推定されている。ただし, このようにして復元されたロシア語が, 漂流民の記憶の中に存在していた音声イメージを再現したものなのか, それとも彼らが実際に耳にしたロシア語の本来の形式であるのかがわからない。もし漂流民がロシア語を習得した際に, 単語単位でしか記憶できなかったとすれば, 彼らが証言した複数の単語からなるロシア語の句または文は, それのよってコミュニケーションを成立させることができたにしても, 自己流の作文であることにはかわりはない。現

<sup>4</sup> ここでは[聞略 a]の底本となった内閣文庫本のことを言う。「ギレメニ」の濁点については[聞略 b]に収められている内閣文庫本の印影でその所在を確認した。

実にそのような句または文を発するロシア人はいなかったのであるから、それらを正しい形態で復元しても意味がない。したがって、復元作業の原則と手順を予め以下のように定める。

まず、仮名表記を分析する前に、漂流民や資料の記録者たちが外国語や日本語にたいしてどのような知識や感覚を持っていたのかを分析する。なぜなら言語資料には漂流民たちや記録者たちの言語的な背景が反映されているはずだからである。

次に、ロシア文字の読み方に見られる表記の原則について検討する。言語資料に含まれるアルファベット表やロシア文字による伊呂波図あるいは五十音図を材料とすることで、漂流民のいわば表向きの文字と音との対応関係を確定する。

そしてこれら二つの段階の作業で得られた成果を利用して、最後に言語資料に収録された仮名表記からロシア語を復元する。その際、それぞれの語句について、二種類の形式を復元することを原則とする。すなわち、漂流民の記憶にあるイメージと彼らが実際に聞いた本来の形式である。ちなみに復元の精度を高めるためには、この三段階の作業を何度か繰り返す必要があると思われる。

### 3.3 情報提供者、聴取者・編纂者の規範意識

言語資料作成が漂流民と聴取者・編纂者との共同作業であったという立場に立つと、日本語、ロシア語あるいはその他の外国語、そして言語一般にたいするそれぞれの参加者の認識がどのようなものであったのかについて凡そのがわかっておいた方が良い。ここでは特に、言語の社会的差異と地域的差異、言語状況、文字という三つの点に関する理解度について検討する。

#### 3.3.1 社会的差異と地域的差異の理解

ロシア語の情報提供者となった光太夫と磯吉には、日本語の環境で獲得し

た規範意識、あるいは言葉遣いの区別にかんする意識があったはずである。例えば、男言葉と女言葉の違い、身分による言葉の違い、職業による言葉の違いというような社会的言語規範は理解できていて当然である。また、彼ら二人は経験が浅かったとはいえ船乗りであり、国内を移動することを生業としているため、言葉に方言差があることを知っている。また、光太夫はロシア滞在中も浄瑠璃本を常に携えていた識字者であることがわかっている。おそらく、標準語あるいは大都市(江戸、京都、大阪など)の言語とそれ以外の地方の言語との差や言語の文体差も理解していたのではないと思われる。

例えば、「ネウエスタ 同上(= 娘(よめ) 下等の詞」,「スバシイボ 忝 下輩にいふ言葉」,「ホトスキリウ 徒然じや 下輩のことば」,「カレイタ 賤人(いやしきひと)の服」,「シャラワリ 同 [= 賤人(いやしきひと)の] 袴(はかま) 此方の股引の如き制也」,「ドロバス 賤人の着る皮襪也。筒の処をゴルニシカといふ」における語義あるいは語義の解説には、社会的位相の意識が見られる。また、「シスペッチ 燭剪(しんきり) シビリにてはスペチニカと云」,「チャーシカ 象棋(しょうぎ) シビリにてペーシキと云」,「ヲヂベヤン ニヤ 猿(さる) シビリにてはサンガといふ」などの解説から、漂流民がシベリア方言と標準語との違いを意識していたことが伺える。<sup>5</sup>

### 3.3.2 言語状況の認識

『聞略』には以下のような証言が見られる。

ムスクワ、ペートルボルクは勿論、すべて本国にては旧(もと)の魯西亜(ロシイヤ)語をもちゐず。多く仏郎察(フランス)、ネメツの語を雑へ用ゆ。礼法は全く仏郎察(フランス)の制による。(卷之五)[聞略 a, 120]

<sup>5</sup> なお、将棋(いわゆるチェッカー)は標準ロシア語で *шашка* であり、これが「チャーシカ」と表記された。しかし、*пешки* はシベリア方言ではなく、駒の名称(「歩兵」すなわち「歩」)である[聞略 a, 460]。

これは、旧都モスクワと新都ペテルブルクだけでなく、ロシア全土でロシア語が廃れてしまってフランス語とドイツ語が使われているという証言ではない。社会的な重要度においてこれら二つの外国語がロシア語に勝るという意識を当時の上流社会のロシア人が持っていたということを伝えているのである。この証言の直後に「魯西亜（ロシイヤ）語はもとスラボニア（翁加里亜（オングリヤ）の地）の語より転じて厄力西亜（ゲレシヤ）の語をまじへ用ゐたり」という編者の注釈が付けられている（＝「附按」）。編者は当時「ゼラガラヒ」という通名で知られていたオランダ語文献<sup>6</sup>を根拠にしているのであるが、先行する証言とは内容的に大きなずれがある。証言者はロシア語が当時のロシアの支配層でどのように扱われていたのかをつたえようとしていたのだが、編者はロシア語の起源にかんする知識を披瀝しようとしているのである。つまり、これは提供者しか知り得ない情報であったということがわかる。<sup>7</sup>

漂流民のこの発言によって、18世紀末のロシアにおける言語状況の一端を知ることができる。これが光太夫自身の観察の結果なのか、それとも彼が接触したロシア人の発言の請売りなのかはよくわからないが、彼自身この情報の意味を理解していることに疑問の余地はない。

なお、『語類』にも同様の記述が見られるのであるが、細部に少し違いがある。

都ハヲロシイヤ之言葉ハ多ク不遣アゲリツコイフランツースの言葉  
を遣町家礼儀杯もネメツをまねる〔語類 a, 44〕

6 この文献は[聞略a, 405]の説明によると、Johann Hübner, *Kruze Fragen aus der alten und neuen Geographie* (Leipzig, 1693) のオランダ語訳 *Algemeen geographie* (Amsterdam, 1722) である。

7 磯吉からの聞き取りをもとにしているといわれている『嚟本』にはこの種の記述が見られないので、これはおそらく光太夫の発言だと考えられる。

つまり、「ペテルブルクではロシア語があまり使われず、そのかわり英語やフランス語が使われている。市民の作法はドイツ風である」と言っている。おそらく、これも先の『聞略』からの引用と同じ情報にもとづいたものであるようなのだが、内容が違っている。おそらく、編者の聞き違いであると思われる。

### 3.3.3 文字にたいする認識

書記体系が備わった言語には「読む」、「書く」、「話す」という三つの局面が存在している。しかし、非識字者にとっては、「話す」以外の局面が存在しない。このことは外国語学習に際しても、文字にたいする態度の違いとして現れると思われる。例えば、神昌丸漂流民に次いで日本に帰国した石巻の漂流民たちは、もともと誰一人日本語の読み書きができなかったのも、ロシアでもロシア文字を覚えなかったことが知られている。

神昌丸漂流民のうちで確実に識字者であったのは光太夫だけである。ロシア滞在中の書き付けや帰国後の筆跡もいくつか残っているのでこのことを裏付けることができる。一方、漂流者のうちでもっとも好奇心が強く、「エト・チョワ」が「これは何」を意味するロシア語であることを発見した磯吉については『北槎異聞』に次のような記述がある。

幸太夫ハ都ニ上リ、磯吉、イルコツカニ居リシウチ、キタイスコイ清也。ノ通辞ト親シム。其ノ人、真文字ニテ物書イテ見セタレドモ、磯吉、文字識(し)ラザル故、通ゼズ。天地ノ二字、及ビー二三ノ数ノ文字バカリゾ見シリタル…（『北槎異聞』卷之三一下線は岡本による）  
[史料集II, 290]

磯吉のロシア文字と発音にかんする具体的な認識はすでに紹介した『嘶本』の記述から知ることができる。これに加えて、『聞略』を始めとする神昌丸



漂流民資料に占める磯吉の役割がかつて考えられていたよりも遥かに大きいものであった可能性が高いという山下恒夫の指摘を考慮すると、<sup>8</sup> ロシア文字については光太夫だけでなく磯吉もかなりのことを知っていた可能性がある。

『文字集』に収められたロシア文字で綴られた多数の語句には、“Екатерина Футория. Алексевна.” [文字集, 印影33] (下線は岡本による, 句読点は原文通り) のような日本人らしい誤り (下線部は вторая が正しい) が稀に見られるのであるが, ほとんどの例は正しく綴られている。このことから神昌丸漂流民が自己流であれ文字の知識を習得したことは, ロシア語の音声を正確に覚えるのにおおいに寄与したと考えられる。またロシア文字を獲得する過程で, ロシア語の音声と日本語の音声との相違と共通性にも比較的明確で固定化されたイメージが形成されたのではないか, つまり, ロシア語を仮名表記する際の原則が作られたのではないかと思われる。

編纂に携わった人達は武士や医師などの識字者である。しかし, ロシア語の音声を仮名表記する際の問題について言及しているのは『聞略』の編者である桂川甫周だけである。彼は「ロシア」という国名の本来の発音と仮名 (編者の言葉を借りれば「国字」による) 表記との関係について以下のように自分の意見を述べている。

魯(ロ)字, 舌を転じて呼ぶ故に, 阿(オ)字をおびたるごとく聞ゆるによりて, 皇朝にてヲロシヤと称し, 支那からも亦(また)俄字を冠(こうむら)せしなるべし。……訳字(やくじ)魯西亜(ロシイヤ), 羅叉(ロシヤ)を以て切近(せつきん)なりとす。 (卷之四)[聞略a, 71]

すなわち, “Россия” の ро /ro/ は子音が巻き舌の [r] であるので, 「オ」音がかぶせられて「オロシヤ」と聞こえるのであるが, 表記は「ロシア」で

8 [史料集 II] に収録された『寛政五年神昌丸二漂流民両目付吟味録』と『魯西亜国漂泊聞書』に対する山下の解題を参照。

差し支えないという。このため『聞略』の中で実際に使用されている表記は「魯西亜(ロシヤ)」、「ロシイスコイ」などかぶせ音が再現されていない。

これに対して、『文字集』、『辨語』、『語類』、『噺本』では漢字表記は「魯西亜」であるが、仮名で表す場合には「ヲロシヤ」、「ヲロシイヤ」、「オロシア」など必ず「オ」音がかぶせられている。つまり、『聞略』の編者はオランダ語学習で培われた自分の表記原則をすでに持っており、ある程度それに忠実であったということができる。

### 3.3.4 漂流民と編纂者の文法意識

光太夫も磯吉も、ラテン語はもちろんのことヨーロッパの言語を学習した経験がないのだから、当然「品詞」という概念や、「法」、「時制」、「人称」、「性」、「数」、「格」などの形態範疇の概念は持ち合わせていないと考えたほうが良い。そして、ロシア語と日本語は特に形態論上の違いが大きいため、動詞や名詞類の語尾変化を理解することが不可能であったに違いない。このことは、『聞略』などの言語資料を一瞥するだけで明らかである。しかし、ロシアに滞在している間に、漂流民たちがロシア語に対する自分達なりの語感を養ったことも事実である。それは以下のような点に現れている。

**3.3.4.1 名詞の形態範疇。**ロシア語の名詞の特徴として第一にあげることができるのは、豊富な格変化である。ミハイロ・ロモノーソフの文法書によれば18世紀半ばの標準ロシア語における名詞の性・数・格は、現代ロシア語と同じである。すなわち、3つの性(男性・女性・中性)、2つの数(単数・複数)、6つの格(主格・生格・与格・対格・造格・前置格)があった。なお、ロモノーソフの文法書には呼格もあるのだが、これはどの曲用クラスでも常に主格と同形になっている(例外として挙げられているのは богъ「神」—боже, Господь「主」—Господи, Христосъ「キリスト」—Христе, Исусъ「イエス」—Исусе のみ [Lomonosov, § 179])。このため、実質上現代語

と同じく6格だと考えて差し支えない。そして、これらの形態範疇のいずれも、漂流民は理解できなかったようである。

先ず、数にかんしては、少数の例外を除いて漂流民が記憶している形式が単数なのか複数なのかがはっきりとしない。例えば、『聞略』の「ナッチャスホジメ 當分(とうぶん)の貸(かし)」, 「ナッチャスイ ちょと立寄」, 「チャースイ 時刻」, 「チャースイ 時規(とけい)」の3例を見ると、最初の例が“на час” (単数で「1時間, しばらくの間」), 最後の例が“часы” (複数で「時計」) に対応していることはすぐにわかる。それでは、「チャス」が単数で、「チャースイ」が複数なのかということ、かならずしもそうとは言えない。なぜなら2番目の「チャスイ」は意味から考えて最初の例とおなじ“на час”だと思われるからである。「チャス」と「チャスイ」がともに単数形の仮名表記であるとすれば、3番目と4番目の長音記号を持つ表記が複数形だということになる。他の資料はどうかというと、『語類』には「時」と「時刻」がともに「チャースイ」と表記されていて、これだけでは元の形式を特定できない。一方、『辨語』には「チャース 時 とき」, 「チャースイ 時計 とけゐ」, 「ナッチャース 今往く」と『聞略』と同じ語句が収められている。この文献だけに限れば、「チャース」が単数であって、「チャースイ」が複数であると言えるかもしれない。しかし、『聞略』, 『語類』, 『辨語』が共通の情報源に依拠していることを考えると、結局、情報提供者にとってこの単語が単数形であるか複数形であるかということは意味を持っていなかった可能性が大きいといえることができる。おそらく、彼らは現実に関方の形式を聞いたことがあるので発音に揺れが生じていたのである。ただ、ふつう複数形で使用される野菜や果物の名称(「アルブーチ 西瓜(すいか)」, 「ヲグリツイ 胡瓜(きゅうり)」), いわゆる *pluralia tantum* (「シチヨト 算盤(そろばん)」, 「ノジニチ 鋏(はさみ)」, 「ノズナ 庖丁の鞘(さや)」) などは複数形が記憶され、その他の名詞は主に単数形で記憶される傾向も観察される。

次に、漂流民の意識の中に単数と複数の区別だけでなく、格の認識も感じ

られない。これは、言語資料中の出現頻度が比較的高い語彙で、「年」を意味する“год”の表記を検討することで明らかになる。この語彙には『聞略』で「ゴータ」、「ゴダ」、「ゴダミ」の3種類、『語類』では「ゴト」、「ゴート」の2種類、『辨語』では「ゴータ」、「ゴドフ」の2種類の表記が認められる。そして、これらに対応していると思われる元のロシア語は単数主格“год”，単数生格“года”，複数生格“годов”複数造格“годами”である。しかし、代名詞や形容詞との語尾の一致が正確ではないので（詳細は3.3.4.2節で），「ゴダミ」（годами）と「ゴドフ」（годов）以外の表記が対応している形式を特定することはできない。また，濁点や反濁点の使用が厳密でないという事実と，既に引用した『嚟本』の文字と表記にかんする証言を考慮に入れると，「タ」は /ta/, /da/, /t/, /d/ のいずれも表し得る。おそらく語尾については，それほど明確な音のイメージがなかったと思われる。つまり，少なくとも18世紀後半のロシア標準語では規範的であった語末の位置あるいは無声子音の直前の位置における有声子音の無声化 [Lomonosov, §98] は，仮名表記に反映されていない可能性が高く，従って，漂流民が記憶した形式が主格形であるとは言えず，むしろ語幹の音声イメージだけかなり確実に意識されていると考えられる（例えば，год, года, ..., годов, ..., годами, ... に対して {GOD} というイメージ）。

性に関しては名詞だけを検討しても何も言えないので次節で分析する。

**3.3.4.2 形容詞語尾の固定化：「ノイ」と「スコイ」。** ロシア語の形容詞は依存関係にある（つまり修飾する）名詞の性・数・格に合わせて語尾形式を変える。ただし，現実には1つの形容詞が持ち得る語尾は下位範疇の単純な組合せ（ $3 \times 2 \times 6 = 36$ 通り）ほど多様ではなく，多くてもその半分くらいである。例えば，形容詞 истинный「真の」についてロモノーソフが示した変化表には，バリエーションを含めてのべ38の語形があげられているが，重複する語形を1つと数えると，全部で14しかない [Lomonosov, §155]。つま

り、語尾には同音意義のものが多い。

しかし、神昌丸漂流民は形容詞の語尾体系をほとんど理解していなかったようである。そのことは、『聞略』卷之十一に「ノイ 之(の)」,『辨語』に「スコイ 国」という項目があることでもわかる。前者はロシア語の形容詞形成接尾辞と屈折語尾の結合“{N}+{語尾}”(-ный, -ная, -ное, -ного, -ной...), 後者もやはり形容詞接尾辞と屈折語尾の結合“{SK}+{語尾}”(-ский, -ская, -ское, -ского, -ской,...)に対応している。

村山七郎は論文「大黒屋光太夫の言語学上の功績」のなかで、『聞略』に「形容詞語尾 -ский (スキー)は見られず, -ской (スコイ)のみが用いられる」ことを指摘している[村山1965b, 12]。確かに, “{SK}+{語尾}”が「スキー」あるいは「スキイ」と表記される例は『聞略』だけでなく, 他の資料にも見当たらず, 「スコイ」が圧倒的に多い。しかし, この表記を見て直ちにロシア語の -ской を復元すべきではない。『聞略』に現れるこの結合は, 「ガランツカヤ 和蘭(おらんだ)」を除いてすべて「スコイ」であり, その上「ゴスダーレ イムペラートルツコイ 皇帝」と「ロシイスコイ ヲロズゴーレワイ ヤア ネズナイヨ 魯西亜語を知らぬ」以外の例は形容詞としてではなく, 「ヤッポンスコイ 大日本」, 「キタイスコイ 大清(から)国」, 「クリリスコイ 蝦夷」, 「フランツースコイ 払郎察(ふらんす)」, 「スウェツコイ 雪際亜(すうえいでん)」のように国名・地名として扱われている。『聞略』卷之四の「魯西亜通商五拾二国名目」にも「スコイ」で終る国名が目立つ。『辨語』において「スコイ 国」という項目が立てられたのも, 情報提供者か編纂者のどちらかが「スコイ」を「~国」に等価の要素と考えていたからに他ならない。

なお, この「接尾辞+語尾」の結合にかんしては, 少数ながら女性主格形“-ская”を復元できる例がある(既出の「ガランツカヤ 和蘭」と『語類』の「リミスカヤ (インペリヤ)」および「プレツカア (インペリヤ)」)。オランダは共和国“республика”なので, 女性形「ガランツカヤ」“голландская”

が正しい。「リミスカヤ」は神聖ローマ帝国のことで、復元すると“римская”になる。「プレツカア」はオスマントルコ帝国、つまり“турецкая”である。これら二つの例は明らかに「帝国」「империя」を修飾する形容詞であるので女性形が正当化される。しかし、『聞略』巻之四には「リムスコイ」、「トレツコイ」、「ガランヂスコイ」という表記が見られるので、「スコイ」はむしろ万能の表記であると考えた方がよい。

このような形容詞の屈折が完全に無視された「接尾辞+語尾」の結合は接尾辞が{N}の場合が典型的である。これについて村山七郎がなぜ[村山1965b]の中で触れていないのかわからないが、出現頻度はこちらが圧倒的に多い。コンスタンチーノフが復元した形式と照合してみると、「ノイ」は-ный, -ной, -ний, -ная と対応関係にある。つまり、文法的な性の区別(主として男性と女性)が無視されているだけでなく、硬変化(-ный/-ной/-ная)と軟変化(-ний)の区別もない。『聞略』の「ノイ 之(の)」という記述から考えて、情報提供者あるいは編纂者がこれを限定・修飾機能を持った要素だと考えていたことは明らかである。

形容詞形成接尾辞{N}は先述の{SK}に比べて使用頻度が遥かに高い。なぜならば、{N}は名詞だけでなく様々な品詞の語幹と結び付いて性質形容詞も関係形容詞も形成できるのであるが、{SK}は原則として名詞語幹としか結び付かず、派生される形容詞も性質を表さない(例えば, человек「人間」> человеческий「人間的な」— 性質形容詞, человеческий「人間の」— 関係形容詞)。そして、形容詞の屈折語尾の中で、硬変化語尾{OJ}(-ой)は、男性単数の(1)主格と(2)対格の異形態、女性単数の(3)与格と(4)前置格、さらに(5)生格と(6)造格の異形態を形成する、最も多義的な形態素である。したがって、これら二つの形態素が結合した{NOJ}を漂流民がロシア滞在中に頻繁に耳にしたので、これが限定的な要素として彼らの記憶に定着したのかもしれない。あるいは、実例の数は遥かに少ないが、“{N}+{語尾}”のもう一つの表記が「ノ」であることから(「フマシノニッキ 木綿糸」, 「ニ

ヂノ 下」— コンスタンチーノフの復元によれば “бумажные нитки” と “нижнее”), 日本語の助詞「の」と音が似ている上に, 機能にも類似性があるので特に「ノイ」が助詞「の」と等価のものと認識されたと説明することも可能である。

漂流民たちがもともと「形容詞」という概念を持ち合わせていなかったにしても, 限定語と被限定語の関係は日本語の経験から十分に理解できたはずである。そして, その限定機能を表す膠着語的な要素が「ノイ」, 「スコイ」(他にも「トイ」などがある)という形式, すなわち {-OI} に落ち着いたのである。そして, 表記から女性形や中性形を想起させる稀な例は, それが名詞として記憶されたか, あるいは不変の形式として理解されていたかのいずれかであろう。ちなみに, 前者の例としては『聞略』の「ホリシャヤ」(「姉」), 後者の例としては『聞略』『語類』の「コトロエ」(「幾(年, 日, 月)」, 「何(月, 日, 時)」)をあげることができる。<sup>9</sup>

3.3.4.3 限定語の形式と位置。 神昌丸漂流民の証言によるロシア言語語資料において二つ以上の単語で表されている語句に特徴的なことは, いわゆる不一致限定語の例の少なさである。これは形容詞や代名詞と違って, 被限定語の形態範疇に語尾を一致させることのできない形式, すなわち斜格名詞や限定的意味をもつ副詞からなる文成分であって, 多くの場合被限定語の直後に置かれる。実例は多くない。例えば, 『聞略』の「リニイナ ワドニシャ 掌文(てのすじ)」と「ヒレーバラフカ 餅店(もちや)」を見てみよう。コンスタンチーノフは前者を “линии на ладони”, 後者を “хлеба лавка” と復元している。このロシア語形が正しいと仮定すれば, на ладони と хлеба は不一致限定語であり, 前者は被限定語に後置され, 後者は前置されていることになる。しかし, 文字の読み方にかんする『嚟本』の証言(既出)では

<sup>9</sup> 〈который〉については『聞略』と『辨語』に「コトロイ」という形容詞の万能型表記も見られる。

“子音文字+硬音符号”を近似的にア行で表記する可能性が示唆されている。先に3.3.4.1で確認したように、語末の有声子音の無声化は必ずしも表記の上で反映されない。そうすると「ヒレーバ」は当時の綴りで хлѣбъ, すなわち主格形でもよいこととなる。『聞略』に収録されている名詞“лавка”を含んでいる商店の名称は他に, 「コヒチノイラフカ 布帛舗(ごふくや)」(гостини́ая лавка), 「レーバノイラフカ 魚肆(さかなのみせ)」(ры́бная лавка)があり, いずれも形容詞が店を意味する名詞の前に置かれているが, 「ヒレーバ」の場合は限定詞の印である「ノイ」がなくても前置された単語は後続の単語に対して限定的な機能を果たしている。結局, これは「餅(=パン)の店」でも「餅屋」でも大きな意味の違いを感じない日本人漂流民の類推による形成だと考えられる。

前節で分析したように, 形容詞は屈折が無視されて{-OI}に固定化されるのであるが, 名詞がそのまま限定語として使用されていると思われる例は少なくない。例えば, 『聞略』の「ウチテリドモ 学校」が учитель+дом(「教師」+「建物」), 「ポロダシチョーツカ 鬚(ひげ)を剃(そる)時(とき)石鹸(しゃぼん)をときてぬる刷(はけ)なり」が “борода+щётка”(「鬚」+「刷毛」)であることは容易に想像ができる。「ポロダースゼフケドマ 娼家(じょうろうや)」, 「ホロダスバニヤ 混堂(せんとう)」に対してコンスタンチーフは, 前者には “бордак”「娼館」, “девки”「娘, 売春婦」, “дом”「建物」を列挙し, 後者には “народная баня”「民衆の風呂」という復元形を当てているのだが, 「ポロダース」と「ホロダス」が同一のロシア語を表している可能性は否定できない。ロシア語音声と仮名表記との厳密な対応関係については本論文の後半に検討することになるので, ここでは「ネポロダユー うらぬ」(не продаю)との類似性から「ポロダース」および「ホロダス」が продажъ (=продажа「売ること」)だと仮定する。そうすれば, 上述の「娼家」は “продажъ+дѣвки+домъ”(「商売」+「娼婦」+「建物」), 「混堂」は “продажъ+баня”(「商売」+「蒸し風呂」)という主格形の羅列であり, 先



の「餅店 (=パン屋)」が “хлѣбъ лавка” であっても、別に特殊な例ではないことがわかる。

このような、語句の形成方法が漂流民のみの知識によるものなのか、それとも資料の記録者・編纂者の類推による創作も含まれているのかは、今のところよくわからないが、かなり一般的な現象だということに変わりはない。

**3.3.4.4 動詞の形態の理解。** 名詞や形容詞の形態範疇が理解されていなかったように、動詞の形態範疇についてもほとんど理解されていない。西欧の教養人であれば、Richard James のように語彙集を любить 「愛する」のパラダイムで始めるなどということもできるのであるが、<sup>10</sup> 日本人漂流民にそのようなことは期待できない。実際に時制と法の区別は極めて曖昧である。例えば、「ツクネ 突(つく)」(ткни), 「トヲキ 搗(つく)」(толки), 「ビョート 打(うつ)」(бьёт), 「ウタルイ 敲(たたく)」(ударил), 「ウビョート 斫(きる)」(убьёт), 「ヤアウビョート 斫(き)ります」(я увьёт) は『聞略』中ではほぼ連続した項目なのであるが、最初の5項目では、日本語の動詞終止形にロシア語の命令法2人称単数 (ткни толки), 直説法過去単数男性(ударил), 直接法現在3人称単数 (убьёт) が対応している(ロシア語は[聞略a]による)。そして、最後の2項目は同じ「斫(きる)」という動作であるが、第6項目は人称に誤りがある。このように、動詞については法と時制に拘らず1つのロシア語の形式ですべてをまかなう傾向が強く、それも上記の命令法2人称単数、直説法の過去男性と現在3人称単数、そして現在1人称単数のいずれかであることが多い。むしろ, приду, приди, пришёлそして пойду пойдёт, пойдём, пошёл のように複数の形式が認められる動詞 прийти 「到達する」や пойти 「出発する」は例外に属する。

なお、動詞の法や時制が理解されていなくても、それぞれの形式が適正に

<sup>10</sup> Richard James の語彙集の第1ページは любить (=любить) の直説法現在時制と過去時制の形式がラテン文字表記で完璧に書かれている [Larin (2002), 214]。

使用されている例は多い。例えば、「ナッチャスポドジテ 物をやる」と「パシヤールイビノダワエ どふぞ酒がのみたい」はともに命令法を使った文である。コンスタンチーノフは前者を“на час подождите”「しばらく待っていてください」、後者を“пожалуйста вино давай”「(葡萄)酒を下さい」と復元している<sup>11</sup>。これらは、「土産や贈答品を渡す意思を伝える」、「酒を要求する」といったコミュニケーション上の目的に適った正しい文である。

ところで、『辨語』には自動詞と他動詞の区別をしようとした箇所がある。すなわち、「испогау 威 をどす 他也」と「испогау 驚 おどろく 自也」の2例であって、はっきりと「他也」(＝他者を脅す)、「自也」(＝自らが驚く)と説明まで付けられている。この文献のロシア語復元作業を担当した中村喜和は前者に男性過去形“испугал”，後者に中性過去形“испугало”を当てている。おそらく，“Я испугал его”「わたしは彼を驚かした」，“Меня испугало”「わたしは驚いた」のような用法が情報提供者の知識にあったという判断から、これらの形式が復元されたと思われる。この動詞 испугать は『聞略』にも収録されている(『語類』にはない)のだが、こちらは「испогау 驚(おどろく)」(復元形: испугал)となっている。漂流民言語資料において中性(および女性)の過去形は全般的に少ないので、むしろ『辨語』の испугало が正しい復元形であるとすれば、これは中性過去形の極めて珍しい出現例であるといえることができる。

3.3.4.5 統語関係の理解。言語資料の本格的な統語分析はロシア語の復元作業がひとまず終了してから行われるべきなのであるが、漂流民がロシア語の統語関係をどのように認識していたのかを大筋で確定しておけば、特に複数の単語から成る句あるいは文の復元が容易になるはずである。

既に見て来たように、漂流民はロシア語の形態範疇をほとんど理解してい

11 コンスタンチーノフは「パシヤールイ」、「ボシヤールイ」に例外なく пожалуйста を当てているが、かつては пожалуй が現代語の пожалуйста の意味で頻繁に使われていたことを [DAL'] で確認することができる。

なかったのであるが、それでもロシア語による意思疎通はできたようである。神昌丸関係者だけでなく、ロシアに滞在した日本漂流民全般を考察の対照としたI. P. ボンダレンコによれば、言語資料に収録された語彙数から見て、ロシアに滞在中の光太夫はかなりの程度ロシア語が操れたという [Bondarenko (2000), 133-139]。

形態範疇の認識がないということは、品詞の選択や語尾変化にも誤りがあるということを意味している。それでもなお意思疎通ができたというのは、言葉の並べ方、つまり統語構造はロシア人の理解可能なレベルであったということであろうか。例えば、『聞略』の「ロシイスコイ ヲロズゴーレワイ ヤア ネズナイヨ」(「ロシア語を知らぬ」)に単純に文字を当てれば“росийской разговаривай (розговаривай) я не знаю”となる。「ロシイスコイ」は限定語的要素 {OI} を持つので「ロシアの」という意味である。「ヲロズコーレワイ」は他にも出現例があり、「商議(そうだん)」, 「咄されよ」, 「御咄し下され」と訳されている。つまり、名詞でもあり本来の動詞命令法でもある。ここでは限定語の直後に置かれているので、やはり名詞と考えるべきで、「会話」を意味している。残りの部分は間違いのないロシア語であるので、結局これで“Я не знаю російскія бесѣды”と同等の内容を伝え得たのであろう。

上記の発話の理解を助けた最大の要因は、ロシア語の統語的な柔軟性である。言語資料に収められた句あるいは文に見られる一つの特徴は、述語動詞あるいは述語機能を持った動詞以外の語形が末尾に置かれているということである。少なくともロモノーソフの文法書の説明文自体の統語構造を見る限り、18世紀ロシア語文章語の語順には現代ロシア語といくつかの点で違いがある。例えば、限定的な意味を持つ副詞(особливо「特に」, токмо「～のみ」)や述語が文末に置かれることが珍しくない。漂流民の文構造は述語の位置にかんして文章語の構造に類似しているのであるが、これは偶然のことである。言語資料に収録された語彙から判断して、おそらく漂流民は18世紀の

本格的な文章語は理解できないので、文章語の影響を受けたと考えることもできない。述語が文末に位置するのは日本語の影響である。日本語と同じ語順、つまり日本語の発想にしたがってイメージを並べたとしても、語彙の選択が妥当であれば不正な形態は容認されて意思の疎通に成功するということである。このため彼らは自分たちのロシア語の語順を修正する必要を感じなかったのだと思われる。

(未完)

#### 参考文献

- [語類 a] 石川真弘・大内田貞郎・金子和正・河合忠信・木村三四吾, 「魯西亜語類」, 『ビブリア』(天理大学図書館報)第45号。42-68頁。1970年。
- [語類 b] 河合忠信(編校), 『魯西亜語類』。1985年。
- [断本] 左近毅・河合忠信, 「楽亭(松平定信)文庫旧蔵『魯西亜断本』一解題と翻刻一」, 『ビブリア』(天理大学図書館報)第105号。81-133頁。1996年。
- [聞略 a] 桂川甫周(著)・亀井高孝(校訂), 『北槎聞略』。(岩波文庫) 1990年。
- [聞略 b] 杉本つとむ 編著, 『北槎聞略—影印・解題・索引—』。1993年。
- [辨語] 亀井高孝・村山七郎・中村喜和(編著), 『魯西亜辨語』。1972年。
- [文字集] 亀井高孝・村山七郎(編著), 『魯西亜文字集』。1967年。
- [岩井 1976] 岩井憲幸, 「『魯西亜語覚書』について」, 早稲田大学図書館紀要, 第17号。66-73頁。1976年。
- [岩井 1986] —, 「『環海異聞』卷之八言語第二十二について—ロシア語の片仮名表記法を中心として—」, 大槻玄沢・志村弘強 編, 杉本つとむ 他 解説, 『環海異聞・本文と研究』。572-552(横書き・左開き21-41)頁。1986年。
- [岩井 1992] —, 「天理図書館蔵『魯西亜語類』について—その写本系統上の位置と特徴—」, 明治大学教養論集, 通巻247号。61-94頁。1992年。
- [史料集II] 山下恒夫 編, 『大黒屋光太夫 史料集』, 第2巻。2003年。
- [村山1965a] 村山七郎, 『漂流民の言語』。1964年。
- [村山1965b] —, 「大黒屋光太夫の言語学上の功績」, 亀井高孝・村山七郎 編, 『北槎聞略』。1965年。(横書き・左開き)1--30頁。
- [XVIII] *Словарь русского языка XVIII века*. Вып. 1-15. (“А”—“Обломаться”). Ленинград/Санкт-Петербург, 1984-2005.
- [Bondarenko (2000)] И. П. Бордаренко *Русско-японские языковые*

взаимосвязи XVIII века *Историко-лингвистическое исследование*. Одесса, 2000.

- [DAL'] *Толковый словарь живого великорусского языка Владимира Даля*. Четвертое исправленное и значительно дополненное издание под редакцией проф. И. А. Бодуэна-Куртета. Т. 1-4. С.-Петербург-Москва., 1904—1912. (リプリント: ナウカ社。東京, 1984)
- [Konstantinov (1978)] Кацурагава Хосю, *Краткие вести о скитаниях в северных водах (Хокуса Монряку)*. Перевод с японского, комментарий и приложения В. М. Константинова. *Памятники письменности Востока*, XLI, Москва, 1978.
- [Larin (2002)] Б.А. Ларин, *Три иностранных источника по разговорной речи Московской Руси XVI-XVII веков*. Санкт-Петербург, 2002.
- [Lomonosov (1755)] *Российская грамматика Михаила Ломоносова*. Санкт-Петербург, 1755. (リプリント: Zentralantiquariat der DDR. Leipzig, 1975)
- [Stone (1996)] Gerald Stone (ed.), *A Dictionarie of the Vulgar Russe Tongue Attributed to Mark Ridley*. Köln-Weimar-Wien, 1996.